

# 中国近代の優生思想、フェミニズムの躓きとたじろぎ

—— 諷刺画「中国における山額夫人」<sup>サンガ</sup>（一九三六年）を読む ——

坂元 ひろ子

二橋大学名誉教授

二〇一六年七月、神奈川県相模原市の障害者施設でおこった大量殺傷事件は幾重もの意味で心肝を寒からしめるもので、日本国内だけでなく世界的に注目された。ことに容疑者の元職員青年は報道によると、それ以前にも衆議院議長への手紙に「重複障害者の方が家庭内での生活、及び社会的活動が極めて困難な場合、保護者の同意を得て安楽死できる世界」が目標としたためについて、事件も「人類のため」の行為だと主張しているときれ、一部ではこれへの共鳴がネットで表明されたものから無理もない。

ダーウィンの『種の起源』に影響をうけたその従兄弟、フランシス・ゴルトンによって、「人種」（遺伝子学的には存在しないが）の先天的な諸特質の改善をめざす応用「科学」として、優生学が一九世紀末には唱えられた。民族の淘汰、優勝劣敗を説き、「文明」国が「野蛮・未開」人を「開化」するのだとして、侵略の口実ともされた社会進化論と同様、その極致ともいえる優生学は生物進化論を唱えたダーウィンの意図を超えたものではあった。だが優生学ではその方策としては産児制限から断種・墮胎、より高度な遺伝子操作などが考えられるようになる。

こうした発想、優生思想からは、社会国家がその都合によって人間の

生命の「優劣」を選別し、「劣」とみなした人々たちを排除・減少させようとすることにつながり、端的にはナチスの人種選別政策、「劣等分子」からくる「負担」の大きさを煽り立てての絶滅計画に用いられたこともあり、戦後は少なくともその負の烙印から忌避されたかにみえた。それでも、「人種」（「人種」は学問的に存在しなくとも人種差別はある）や社会国家の発展繁栄やマジヨリテイの「健常者」の負担削減、福祉向上のためにとの名目で、それこそ「人類のため」にそうした願望は続いていたといえよう。

しかも、形を変えた優生思想への警戒の解除は脱「戦後」風潮のなか、（遺伝子操作による医療、生殖コントロール、そのビジネス化とともに一挙に進んできている。一九九〇年代からは、子宮に着床する前の受精卵の遺伝子や染色体に異常がないか検査する「着床前診断」が広まると、倫理性が問われながらも、その傾向には拍車がかかってくる。同様に経済水準の上昇や少子化傾向を背景に、不妊治療と結びつき、アメリカなどで世界向けのビジネス化が始まっている精子・卵子バンクでは皮膚色や毛髪色、病歴など事細かな情報を記載したオーダー・リストを作成、より露骨な優生思想・人種選別を強化しかねないと危惧されている

ARENA



2017

という。日本でも不妊治療となると、国の少子化対策だけでなく、治療が与える心身への負担がどれほど重くとも、「産む権利」の行使であるかのように肯定されがちで、非行使者への抑圧問題すらおこる。一方で、遺伝しない感染症でしかも感染力が非常に弱く、特効薬も早くに現れたハンセン病の患者を、一九九六年まで長年にわたり強制的隔離、断種・墮胎させ続け、社会・民族のために彼らの「産む権利」など一顧だにしなかったことも知られる。

加えて日本は植民地支配・侵略戦争への反省・謝罪・賠償を、戦後すぐ始まった冷戦構造下で対米追随と引き替えに免責されたのをいいことに、中国・朝鮮半島をはじめアジアへの蔑視を克復・払拭してはこなかった。しかも中国・韓国などアジア諸国の近年の経済発展はめざましく、日本が長期没落傾向に転じると、それへの焦り、それと明らかに共振するヘイトクライムも近年、目立ってきている。指摘があるように、そうしたことも今回の事件の背景として無縁とはいえないだろう。

ふりかえると筆者はかれこれ二〇年以上にわたり、中国近代思想文化史の分野において二〇世紀初に浸透した社会進化論への注目から優生思想とフェミニズムの関係にも関心をもってきた。もちろん中国の場合、「文明」強国による「未開」弱国の併呑「開化」対象とされてしまうという危機意識からの社会進化論受容ではあるが、多民族国家ということもあり、その受容はさまざまな問題をはらんでいた。さらに中国で長く続き、近代になって「野蛮」で「弱種」を産むと難じられるようになってきた纏足習俗、男系の家を継ぐ男児を確保するため、また農業労働力確保のために強いられる「多産」という、ジェンダーや階層の問題もからむだけに、なおさら難問といえる。それだけにこの事件で改めて優生思想の問題の深刻さを痛感した。

中国近代の優生思想の問題では、筆者も『中国民族主義の神話——人種・身体・ジェンダー』（岩波書店、二〇〇四年）でつとに論じたように、清末には厳復による社会進化論の翻訳（『天演論』一八九八年刊）などで「択種留良（種ヲ選ビ良ヲ留メル）之計」という訳語をあて、また一八八〇年代には福沢諭吉らによつてゴルトンの優生学が紹介されていた日本経由でも初歩的には紹介されるようになっていた。

しかしそれが本格的な言説になっていくのは、第一次世界大戦後のことである。大戦中・戦後にかけて、中国は辛亥革命による共和国誕生から数年でしかない中華民国のあり方、その内実が北京政府の混迷のなか、厳しく問われるとともに、「伝統」批判をとまなう欧化的な新文化運動が始まる。そこでは長く続いて一九〇五年に廃止された科挙と不可分であった教育制度を普及教育へと改変、アカデミズムを西欧近代対応へと再編する取り組みがある。さらにはロシア革命の影響をうけつつ儒教的な精神労働偏重から「劳工神聖」への労働観の転換がある。そしてジェンダー規範・生殖観の平権的改変を喚起した点はなかでも大きい。

フェミニズムと優生思想との結びつきは、民国期の新知識人たちの重要な思想資源のひとつ、あるいは磁場といつてよいだろうが、フェビアン協会系の思想圏から得られたところが大である。フェビアン協会系はウィリアム・モリスと親しかつた詩人エドワード・カーペンターや「優生問題自体がすぐれて女性問題」とみた性科学者のハヴロック・エリスらの集まりがもとになり、社会改革へのコミットをめざし、一八八四年に設立された。ジョージ・バーナード・ショア、社会学・経済学者のウェッブ夫妻、作家H・G・ウェルズ、のちにバートランド・ラッセルにいたる知識人たちも集う。離合はあつたが改良主義的社会的な協会ではあり、二〇世紀の戦間期にはギルド社会主義者G・D・H・コールや

ハロルド・ラスキらが影響力をもった。その間、イギリスの優生学も進み、一九〇七年には優生教育学協会 (EES) が創設されるとエリスやシヨウらフェビアン系の知識人たちが会員となっていた。

シヨウやラッセルは訪中したし、ラスキらもまたのちに中国政治論者への影響力をもつていくことを考えると、フェビアン系の思想圏の磁場の存在の大きさがわかるのだが、五四新文化運動期の文人たちがまずフェミニズム、性科学、生殖観において惹きつけられたのであった。魯迅とともに五四文学を中心に創つていったその弟、周作人なども、最も尊敬する思想家としてエリスをあげ、その女性主義や性科学、優生思想と社会主義について関心をよせていた。

まして、多産で病死した母をもつたことからニューヨークの貧民街で貧困家庭の女性に家族計画・避妊法を広めようとし、先駆的な診療所を開設したマーガレット・サンガー（一八七九〜一九六六年）もフェビアン系の人脈と親しかった。その活動から官憲にいらまれて逮捕され、起訴を逃れようと一九一六年に渡欧し、H・G・ウェルズや「師弟」恋愛関係といわれたエリスらと親交をもち、その優生思想からも影響を受けていた。

中国の新たな青年たちにとって切実な問題となっていたのは結婚、つまりは家の問題であった。男系で継続する家の制度では親が家の格・財力をみて結婚を決め、一切をしきり、大家族の生活を送ることになる。女性は家を継続するために後を継ぐことが可能な男子を多く産むことが求められ、裕福な家ほどそのために妾がひとりならずおかれ、そのための家族間争いも茶飯事であったことが書簡や日記などからもうかがえる。だがそれはまだいいほうで、貧しい家の少女は口減らしのため童養トシヤン（幼女が夫になる男児の世話係なども兼ねて買い取られる）に売られ、

貧しい男性は結納金も用意できず、結婚できないことにもなる。日本においても山川菊栄が訪日前のサンガーの著作 *Woman and the New Race*（一九二〇年）をひきながら、同年、その「任意的母性」論を紹介する「多産主義の呪い」（一九二〇年一〇月）を発表していた。より強固な男系の家族制度におかれた中国女性にとつてこそ「多産主義の呪い」は強烈なものがあつたろう。それだからこそ、出産・生育の「数より質」をと主張する優生学が往々にして女性解放主張の武器として、戦略的にはあれ、用いられることにもなった。欧米や日本のみならず、中国でもそうであった。

一九二一年にはアメリカ産児制限連盟を設立、世界を回ったマーガレット・サンガーが翌一九二二年、産児制限運動とともに推進しようとした石本静枝（当時名、のちの加藤シヅエ。ニューヨーク滞在時にサンガーと出会う）のいる日本、ついで中国を訪問した。女子学生受け入れを一九一九年から始めたばかりの北京大学において、学校での性教育講座の先駆ともいべき講演会が開かれた。官憲による干渉で活動が制約された日本とは対照的に、蔡元培学長が主宰し、ジョン・デューイ講演の



写真1 左から胡適・サンガー夫人・張競生（『農報副刊』1922年4月25日掲載）

時と同様に新文化運動の若手スター教授、胡適が通訳を担当、さらに性心理・愛情問題講座を開設してのちに「性博士」の異名をとる教員、張競生も陪席した（写真1）。立見もでた二〇〇〇人からの聴衆に、女性講師が「産児制限とその方法」として性交や避妊法まで語ったのであるから、そのインパクトの大きさはいかほどだったことか、参加者の記録などからもうかがえる。もちろん従来の家制度や性倫理の護持、さらに人口論の観点などから産児制限に反対した論者の響きもかっていたのであり、そのためにこそその破格ともいえる待遇でもあったろう。

北京のあと、上海でもサンガー夫人（離婚していて、この年には石油王と再婚するが）は一九二〇年に世界キリスト教禁酒同盟支部として女性の福利向上の観点から産児制限をも広める組織、中華婦女節制会を設立した王立明（のち日本占領下の上海で暗殺された夫の姓を冠して劉王立明）に迎えられた。江蘇教育会・中華職業教育社・家庭日新会の要請で行われた講演は「産児制限の重要性と方法」、北京大学での話とほぼ同じだったという。ただ胡適と同じくコロンビア大留学経験のある若い女性教育学者、俞慶棠が通訳に当たったが、羞恥心のあまり途中で男性医師に交替することになったというエピソードが当時の状況を物語る。

その当時、女性メディアはサンガー夫人特集を組み、主要総合雑誌もこぞつとりあげた。女性雑誌の草分け、『婦女雜誌』八巻六号（一九二二年）でのインタヴューで、中国が西洋の轍を踏んで、一国の強弱を左右する知識人に産児制限させるのではなく、「今日の計としては、ただちに貧民・病人の子だくさんを禁止してその出産率を減らすべき」だと忠告した。産児制限はいうまでもなく階級問題でもあった。

その間、アメリカでは二〇世紀以来、移民政策とのかかわりで資本が大量に投入され、優生記録局を中心とした優生学研究機関が整備されて

いた。留学中の潘光旦はそこで最先端の優生学を学びつつ「中国の優生学」研究に入り、一九二六年に帰国後、本格化させる。だが潘光旦の研究は以上のような新文化の流れとは色合いを異にするものであった。

生物としての人間は適者生存の自然淘汰だけでなく文化・社会淘汰が働き、文明が進めば進むほど不適者の生存が保障され、種族滅亡に至りかねない。遺伝より環境を重視する楽観論者の人権・平等重視にもとづく個人主義は社会や種族への責任感に乏しく、社会主義やデモクラシーも環境万能説と人類均等主義からやはり社会の優者を冷遇抑圧し、劣者を優遇することになり、種族の前途は危うい、と。そこで都市よりも自然淘汰が働き、虚弱者の生育にむかない中国農村、祖先の祀りを個人の幸福に優先させ、家長に仕える風習、家長が釣り合いを基準に決める中国式結婚こそ優生学になうと説く。中流以上における産児制限や、育児より経済的自立を求める女性は晩婚や独身主義ともども「種族不祥の兆し」と断じたのだから、新文化の青年たちとは対立することになる。

とはいえ、これに新文化陣営から論争を挑んだ魯迅・周作人の弟、周建人にせよ、優生学そのものを批判したわけではなかった。環境重視ではあるが、「人口のやみくもな数量的増加」は不良者にも繁殖を鼓舞し、反優生学的である。本来、人間は「醜悪、凶暴、低能、病的」でない「健全な異性」にひかれるものなので、個人選択のほうがむしろ優生学的、要は「遺伝学の知識の普及、優生学の理想の注入で青年の恋愛選択において優生学の理想を養わせ、人種改良の重要性を知らしめ」ればよいとしただけのことであった。

一九二〇年代中ごろの潘光旦・周建人論争後、産児制限や優生学的な思想は広がっていったが、安定した統一政府の立ち上げに時間を要し、国語統一問題すら手間取っていたほどで、政策化されていったわけ

はない。一九三〇年代にはいると北平（北京）婦嬰保健会の組織から産児制限の普及・実践ネットワークが形成されていき、運動はロックフェラー基金を受けた医学院に付設のミッシュナリー系北京協和医院などを中心に、女性が主の民間の社会活動に根付いていったかにみえる。論壇で王立明ら女性も議論をはった。

満洲事変以降の民族復興議論では潘光旦が女性論者から批判もあびつつ、持ち前の優生学論を唱えた。民法の再編にともない、従前の家制度は土台を失う時機に至り、高學歷女性もでてきつつあり、生殖問題もはや男性論者の独壇場とはなりがなくなったのは確かだろう。だがその反面、国家統治観点からむしろ「女は家に帰れ」論のようなミソジニーめいた「抵抗」勢力も強まりつつあり、ジェンダー規範の動揺はさまざまな影響をもたらすことになる。同じく三〇年代は統一政府のもとでの経済発展を背景に都市モダン文化・消費文化・メディア文化が左翼文化とともにさかえ、それにもなつて新タイプの女性が現れ、モダンガール現象もみられ、人びとの羨望・欲望とともに批判・攻撃の対象ともなつた。それはほとんど男性によつて制作された当時の漫画文化をみても、明らかだつた。

筆者はこの一〇年ほど、画像資料に興味を抱いてきたこともあり、こ



さかもと ひろこ 一九五〇年生まれ。東京大学大学院人文科学研究科博士課程を単位修得退学。山口大学教養部助教授・東京都立大学人文学部助教授・一橋大学大学院社会学研究科教授・同特任教授を経て二〇一六年よりフリー。中国近現代思想文化史研究。著書『中国近代の思想文化史』岩波新書、『連鎖する中国近代の“知”』研文出版、『中国民族主義の神話——人種・身体・ジェンダー』。共編著『新編原典中国近代思想史』全7巻、『モダンガールと植民地的近代 東アジアにおける帝国・資本・ジェンダー』、『アジア新世紀』全8巻。共訳、李沢厚『中国の文化心理構造』平凡社。譚嗣同『仁学』岩波文庫。ほか（以上、記載なきは岩波書店）。

こでもとりあげておきたい。拙著の本の帯にも用いた諷刺漫画（図1）をいたく気に入つたのであつたが、「色彩画家」と称されている作者の画を無彩色かつ小型の新書版（拙著『中国近代の思想文化史』岩波新書、二〇一六年）サイズではインパクトをどうしてもそがれ、残念に思つていたので、特にカラー掲載を請うたのだつた。

この図は『中国漫画』China Sketch 六期（一九三六年四月二五日日刊）。なお上記拙著八九頁に一九三五年としたのは誤りで、ここに訂正したい）の表紙に使われた朱金楼の作品。キャプションは以下の通り。

「中国における山額（サンガー）夫人

かわいそうな栄養不良の母親よ！避妊粉薬を一服さしあげましょうか？」

上記のように、一九二二年のサンガー夫人が訪中時に新文化の学界で歓迎されたことは、若い教授に囲まれた知的な風貌のサンガー夫人の写真（写真1）にみてとられる撮影者の好感、敬意からも察せられる。それが同じ女性のここでの戯画化はなんと辛辣なことか！サンガー夫人が上記のように、中国人は「貧民・病人の子だくさんの禁止」を最優先するようにと建言していたことを意識している。角をはやした鬼のような面相の西洋人女性が貧しい農民母子に毒薬でも飲めといわんばかりに語りかける、といった印象さえ与える。モダンなスタイルだが肉づきはよく、身長割に小さい足にハイヒール、これは当時、モダンガールに対する揶揄でも使われた「洋纏足」の呼び名を連想させる。対する農民女性は警戒もしくは拒むような表情で、幼児を抱きかかえ二人の子を連れ歩くその身体はともに栄養失調で極度にやせ細り、鼻も低い。だが農婦の足だけは大足、肉体労働で纏足などしていられなかつた階層だ。

この漫画雑誌は抗日を強く意識した作者、朱金楼がほぼ一人で制作し



图3 丁深「科学的生活」(『中国漫画』11期、1936)



图1 朱金楼「山額(サンガー)夫人在中国」(『中国漫画』6期、1936.4.25)



图2 朱金楼「古城末日記」(『中国漫画』10期、1936)

ていたといい、反帝国主義の色彩が濃厚で、産児制限もそうした視角から捉えられている。帝国主義、植民地主義の側、優勝劣敗の勝ち組の側から負け組に「楽にしてやろう」と、当時はまだ開発されていなかった経口避妊薬でその減数化をはかる。実はそれが勝ち組を「楽にする」滋養剤になる、という優生思想のはらむ冷酷さを鋭く暴いてみせる。一九六〇年にアメリカで世界初の経口避妊薬が誕生するが（薬効はともかく民間療法的なものは各地にあったろうが）、実は開発のきっかけは女性が主体となる避妊法を求めたサンガー夫人が科学者と出会ったことになったという。この漫画の偶然の先見性は奇なるかな、というべきか。アートとしては野山や花木を配する中国画の構図、色彩は独特で、角張った線と曲線を組み合わせ、対象を大胆にデフォルメし、農地も円形にして角張った人物とのコントラストをつける。強烈な色彩使用、大胆なデフォルメ、激しいタッチを特徴とするという二〇世紀初のフォービズムと表現主義の影響をみてとれるモダンさがある。

それもそのはずこの作者、朱金楼（一九一三〜九二年、朱錦縷とも、上海の人）は民国元年創設の名門、上海美術專科學校卒で、油絵・水彩画を得意とした本格的な画家・美術教育コースの人物である。一九三五年七月にこの『中国漫画』を上海で創刊編集（創刊号は中国図書刊行社、次期から中国漫画社、一九三七年一四期まで発行）、また映画への関心も強く、何人かと雑誌『電影・漫画』一九三五年を編集した。一九三七年、日中本格開戦で『救亡漫画』編集委員となり、戦中・戦後を通じて軍の文芸工作に従事する。五〇年代には中国美術學院の前身で教鞭をとったが反右派闘争で右派とされ、一九七九年の名誉回復までは多くのアーティスト同様、苦難の道歩んだ。

この漫画が掲載された一九三六年、インドなどを回ったサンガー夫人

は再度、訪中、春先、上海に短時間立ち寄ってメディアに騒がれた。同年秋にも協和女子医科大卒で北京の保健会ネットワークで中心的な活動をした楊崇瑞国立第一助産学校校長の要請を受けて、学生や医療従事者らむけに産児制限の各種方法と今後の展望について講演を行った。保守勢力の抵抗はあり、新聞で「所謂外国反動医学者」とも紹介された。

すると、少なくとも全面的に評判が著しく悪化したことではなさそう  
で、朱金楼の意図がかかる場所である。題材とした契機は一二年ぶりのサンガー夫人再訪のニュースにあったろう。まずは産児制限そのものよりは、貧民・病人に限定する優生学的なダブルスタンダードへの帝国主義批判をこめた諷刺・揶揄があるのは確かである。いくら女性の、中流以上の中国人の味方をしたといっても、当時あつての帝国主義的支配・被支配の関係そのものが相対化されうるものではない。朱金楼は、サンガー夫人の「親切」なことばと「楽」に対して、「語ることができない」中国の貧しい子だくさんの農婦を描いてみせた。

朱金楼の作品をさらに見ると、日中戦争本格化の前年だけに、より抗日民族主義が濃厚なものもある。同雑誌一〇期「狂想（曹雪芹『紅樓夢』でいう「痴」―荒唐無稽の言に辛酸の涙、をふまえる）とある」という特集号（中）掲載の「古城末日記」（図2）という日本人の狼藉の図である。北京の故宮（紫禁城）・天安門の華表・石獅子、白塔、天壇といった著名歴史建造物に日本の武士が攻め入り火を放ち、日本人は刀を振り回して「救亡運動」ののぼりを掲げるのみの中国人を斬り殺し、国宝の壺や四庫全書のような貴重な文化財を盗み、中国女性をさらうといった素材・構図である。満洲・上海事変以降のことであり、翌年以降に多かれ少なかれ現実化したことの子兆のような痛みを今となれば感じざるをえない絵ながら、独特に鮮やかな色調、そしてその線の描写・デフォー

ルメはいずれもやはりモダンな美しさを感じさせる作品である。二〇、三〇年代にさかんとついていた東西文化論戦もそこには反映されているだろうが、女性が略奪対象として描きこまれる点に、やはり傷つけられようとする男性の民族的プライドが垣間見える。描かれた女性の側からすれば、帝国主義による暴力の被害にあつた、それは動かしがたい事実だが、それに同胞男性のプライドからも抑圧なり暴力が加重される可能性がある。ジェンダーの視角を欠き、そのことにまで朱金楼は思いつけなかつたであろう。

そんなことを考えるのも、朱金楼が一人で編集した『中国漫画』には以下のような作品も掲載されているからである。同じく一〇期の杭州川子作「公夫公妻」制実行後の狂想」という作品などは、民国期の自由恋愛、共産主義への反キャンペーンで用いられた「公夫公妻」（「共夫共妻」とも）をとりあげ、「貞操」などなくなり、妓院（ここでは遊郭）も必要なくなる、といったいかにも流言風の「狂想」が示される。また、同期の王須云の「女権狂想」では、男子が「娼夫」に「墮ち」、「男昌（娼の字をもじって一字とした作字）院」に女の客が来て買い、職業につき女性がが増えて男は乞食に「墮ち」、一方、「女権楼」に「女医師花柳病（性病）専門治療」の看板がかかる、といった具合である。同様の作意は少なからず同じ漫画家をかかえた同時期の代表的諷刺漫画雑誌『時代漫画』などにも多かれ少なかれみられたもので、現実の男女の反転であつて、ジェンダー規範の変容、要は女性の自立・社会進出への嫌悪・警戒につながっているとみてよい。

「科学末日」を掲げる二期「狂想」特集（下）（一九三六年）の表紙には、ロボットの脅威に人間が指図を哀願する、というキャプション・諷刺図があり、西欧近代批判がこめられている。それでも、同じ西欧近

代由来だからというのだろうか、女性の台頭への揶揄もそこに配置される。たとえば丁深の漫画「科学的生活」の第五コマ（図3）は、女性の妊娠出産には危険がともなうので、「将来、科学が発達したら、「科学伝種（種の保存）機」を発明する」として、卵子に精子を注いで機械に育てさせる、という生殖の機械化の図である。今なら驚かない発想ながら、女の方がままでとんでもないことになる、という意識がすけてみえる。せつかくの近代批判が、残念ながら女性蔑視だか恐怖により躓いてしまつている。朱金楼の帝国主義諷刺画にも同様のことがいえるのではない。そしてフェミニズムの躓きが優生学を選択した、あるいはしつつかつていくように思える。反植民地主義とフェミニズムの一択化といった問題も同様であろう。

中国に限らず、どこにあつても躓いたらまずたじろぐほかない。たじろぐ力があつてこそ、いざれ復古（たいていはインチキ）ではない、いわば批判的近代のありようを想像できるようになるかもしれない。さしあたり「不適者生存」可能、沖繩という「ぬちどうたから」（命どう宝）を根底として「優生」という生の選別思考、まして「国益」や「人類（実際にマジョリティ）のため」といった魔力に抗うよすがとしてみよう。現在の目をそらしたくなるまでの危機的状況を変え、将来のさらにのつびきならぬ悲惨を回避するうるかどかかは、「中国における山額（サングァー）夫人」図から何を讀みとるのかにかかつて思うように思えるということを書いておきたい。（二〇一七年酷暑の夏、記す）